



TITLE:

後腹膜原発粘液嚢胞腺癌の1例

AUTHOR(S):

森, 直樹; 薦原, 宏一; 福原, 慎一郎; 原, 恒男; 山口, 誓司

CITATION:

森, 直樹 ...[et al]. 後腹膜原発粘液嚢胞腺癌の1例. 泌尿器科紀要 2003, 49(9): 559-561

ISSUE DATE:

2003-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/115037>

RIGHT:

後腹膜原発粘液嚢胞腺癌の1例

市立池田病院泌尿器科（部長：山口誓司）
森 直樹，蔦原 宏一，福原慎一郎
原 恒男，山口 誓司

A CASE OF RETROPERITONEAL MUCINOUS CYSTADENOCARCINOMA

Naoki MORI, Koichi TSUTAHARA, Shinichiro FUKUHARA,
Tsuneo HARA and Seiji YAMAGUCHI
From the Department of Urology, Ikeda Municipal Hospital

A 61-year-old woman was admitted to our hospital for right abdominal mass. Various examinations revealed a retroperitoneal tumor. Open surgery was performed. Pathological findings revealed a mucinous cystadenocarcinoma. We review and discuss 24 cases of retroperitoneal mucinous cystadenocarcinoma reported in Japan.

(Acta Urol. Jpn. 49 : 559-561, 2003)

Key words : Retroperitoneum, Mucinous cystadenocarcinoma

緒 言

後腹膜腔に発生する腫瘍は非上皮性のものが多く上皮性腫瘍は稀である。今回われわれは後腹膜原発粘液産生腺癌の1例を経験したので若干の文献的考察を含めて報告する。

症 例

患者：61歳，女性

主訴：右側腹部腫瘍

既往歴：高血圧，30年前に虫垂切除術

家族歴：特記すべきことなし

現病歴：20年前より右側腹部の腫瘍に気づくも放置していた。高血圧にて当院内科通院中。2001年5月頃より右側腹部の異和感を認め精査したところ，右後腹膜腫瘍を認め同年7月11日当科紹介受診となった。

現症：身長 147 cm，体重 56 kg，体温 36.3℃，血圧 140/80 mmHg，右側腹部に小児頭大の硬い腫瘍を触知した。

入院検査成績：検血，血液生化学，尿検査では異常所見なく，腫瘍マーカーにて CEA 24 ng/ml，CA19-9 546 IU/ml と高値を認めた。内分泌学的検査では異常所見を認めず，便潜血反応は陰性であった。

腹部超音波検査：右側腹部に径 14×10×11 cm，内部不均一，一部 high echoic lesion のある嚢胞性腫瘍を認めた (Fig. 1)。

腹部 CT：右腎下極に多房性で壁に石灰化のある嚢胞性腫瘍を認めた (Fig. 2)。造影 CT で乳頭状に造影される部位を一部認めた。

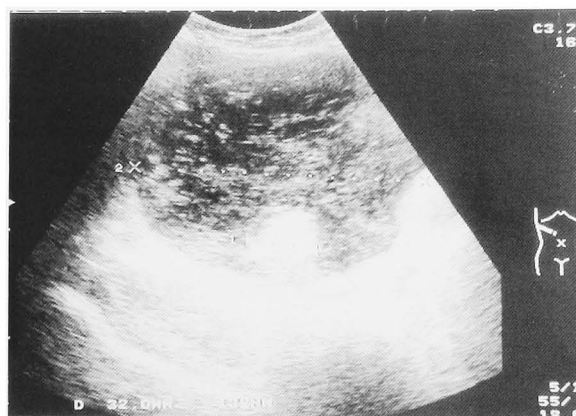


Fig. 1. Abdominal US showed that the cyst contained not only fluid but also floating contents.

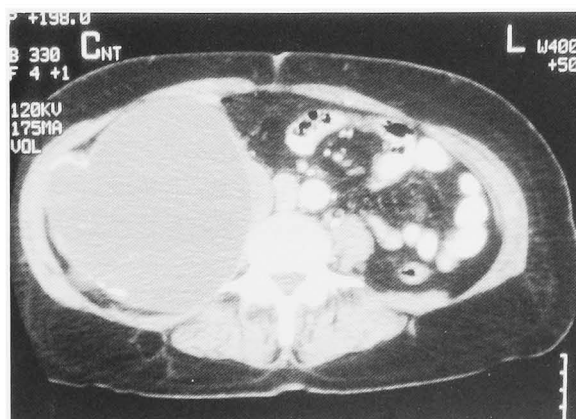


Fig. 2. Abdominal CT scan showed a large retroperitoneal cystic lesion with calcification.

腹部 MRI : T1 強調像にて high intensity な部分があり、内腔に出血を伴った嚢胞性腫瘍がみられた。

腹部 CT, 腹部 MRI, 注腸検査, 胃内視鏡検査にて後腹膜以外に異常を認めず、以上より後腹膜原発嚢胞性腫瘍と診断し2001年9月4日後腹膜腫瘍摘出術を施行した。

手術所見：右腰部斜切開から傍正中切開を加え後腹膜腔に到達した。腫瘍と腹膜が一部強固に癒着しており腹膜を合併切除した。腫瘍と腎および下大静脈とを剝離し、腫瘍を腸腰筋からそぎ落とすように剝離を行った。その操作の際、腫瘍被膜の損傷を認め、暗赤色の内溶液を 1,100 ml 吸引した。最後に femoral nerve も剝離し腫瘍を摘出した。

摘出標本：径 14×10×11 cm で、内部に乳頭状に突出する病変を認め、内部は粘液で満たされていた。

病理組織所見：嚢胞壁から内腔に向かう上皮の乳頭状病変や茎を持った粘液性ポリープが認められた。嚢胞壁は粘液産生異型上皮で覆われていた。

以上よりムチン産生嚢胞腺癌と診断した。

術後経過：術後 CEA および CA19-9 は正常化し、術後9カ月現在、再発の徴候は認められない。

考 察

後腹膜にムチン産生嚢胞腺癌の発生する原因として、①奇形腫からの発生¹⁾、②後腹膜の異所性卵巣に由来²⁾、③後腹膜へ陥入した体腔上皮³⁾などが考えられている。

現在では Rosai らによる③の説が有力である。卵巣被覆上皮と腹膜被覆上皮はその発生過程において、ともに同じ体腔上皮 (coelomic epithelium) から分化するが、何らかの原因で腹膜被覆上皮の一部が後腹膜腔に陥入し、そこで何らかのエストロゲンの作用により再び体腔上皮と同様な分化能を持ち合わせた細胞に先祖帰りし、次に卵巣上皮の性質をえて、そのあと卵巣によく認められる腺癌に進展していく。

一般的にムチン産生腫瘍の発生母地として卵巣が最多で、ついで脾臓、虫垂の順となっている。また、後腹膜腔は転移性腫瘍の発生部位として重要であり、後腹膜原発ムチン産生嚢胞腺癌の診断は卵巣、虫垂を含めた腸管、脾臓などに異常を認めないことの確認が必要である。自験例では、手術時所見、注腸検査、腹部 CT, 腹部 MRI にて後腹膜腔以外に異常を認めず後腹膜原発嚢胞腺癌と診断した。

後腹膜腔での発生は稀で文献上、後腹膜原発嚢胞腺癌は自験例をいれ本邦報告24例を認めた⁴⁻⁷⁾ (Table 1)。

年齢は25～86歳、平均52歳であった。性別は男性1例、女性23例と圧倒的に女性に多く発生している。

画像診断として超音波検査や CT により後腹膜嚢

Table 1. Twenty four cases of retroperitoneal cystadenocarcinoma reported in the Japanese literature

Age	25-86 (mean=52)
Sex	Male : female=1 : 23
Symptom	Abdominal mass 13 Abdominal pain 6 Abdominal fullness 2
Size	6-23 cm
Elevation of tumor marker	CEA 6 CA19-9 3 CA125 2
Treatment	Tumor excision 24 Chemotherapy 6
Prognosis	No evidence of recurrence 22 Death 2

腫の診断は容易であるが、良悪性の鑑別は困難であり本症例を含め悪性の術前診断はえられていない。一般的に悪性を疑う所見として嚢胞壁の不整、周囲臓器への浸潤、リンパ節腫大などがあげられるが、田村ら⁸⁾はレントゲン上石灰化の認められた部分に病理学的に悪性が認められたとしている。自験例も含め嚢胞壁に石灰化を認めた症例は10例にのぼる。後腹膜嚢腫で石灰化を認めた症例は悪性を念頭に置いた対応が必要である。

腫瘍マーカーについては、CEA 高値をみとめるものが6例、CA19-9 高値が3例、CA125 高値が2例にみられ本疾患診断の助けになるものと思われる。

後腹膜腫瘍の症状は、後腹膜腔という特性もあり大きくなるまではほとんど症状はなく、腫瘍増大による腹部腫瘍もしくは疼痛でみつかれる場合ほとんどである。そのため、腫瘍径も大きいものが多く、6～23 cm にまで至る。治療は全例に手術が施行されており、そのうち1例にのみ非完全摘出術が施行されている。しかし、術中被膜損傷をきたしたもので、腹腔内に再発をきたし死亡している症例も1例みられた。

術後の追加治療に6例に化学療法が施行されており、CAP (シスプラチン、アドリアマイシン、サイクロホスファミド) 療法施行例が多い。自験例では術中、内容液が後腹膜内に流出したが、術後の腫瘍マーカーが正常化しており化学療法を施行しなかった。

本疾患の予後は24例中、2例に再発死亡を認めているが比較的良好である。しかし、再発死亡した症例もあり、とくに術中被膜の損傷を認めた症例では厳重な経過観察が必要である。

結 語

極めて稀とされている後腹膜原発粘液嚢胞腺癌の1例を経験したので、若干の文献的考察を加えて報告し

た.

本論文の要旨は第179回日本泌尿器科学会関西地方会において発表した.

文 献

- 1) Peterson WF: Malignant degeneration of benign cystic teratomas of the ovary: a collective review of the literature. *Obstet Gynecol Surv* **12**: 793-830, 1957
- 2) Burnett JE Jr: Supernumerary ovary. a case report. *Am J Obstet Gynecol* **82**: 929-930, 1961
- 3) Rosai J: Peritoneum, omentum, mesentery and retroperitoneum. *Ackerman's surgical Pathology* **6**: 1480-1504, 1981
- 4) 高山仁志, 伊藤喜一郎, 東田 章, ほか: 馬蹄腎に合併した後腹膜発生 mucinous cystadenocarcinoma の1例. *泌尿紀要* **42**: 573-576, 1996
- 5) 上田通雅, 池田光之, 西江 浩, ほか: 後腹膜原発粘液嚢胞腺癌の1例. *日臨外医会誌* **56**: 1722-1726, 1995
- 6) 石山健人, 山崎春城, 前田重孝, ほか: 後腹膜原発粘液性嚢胞腺癌の1例. *臨泌* **55**: 249-251, 2001
- 7) 鄭 智誠, 小野寺成実, 林 茂徳, ほか: 壁在結節を伴う後腹膜原発粘液性腺癌の1例. *日産婦埼玉会誌* **31**: 57-61, 2001
- 8) 田村祐樹, 安川林良, 河田 晶, ほか: 後腹膜に発生した粘液嚢胞腺腫—borderline malignancy の1症例—. *松仁会医誌* **29**: 79-85, 1990

(Received on February 18, 2003)
(Accepted on June 15, 2003)